

大高鷲津・丸根砦コース

大高散策路
JR 大高駅・・・650m・・・鳴海八幡宮・・・600m・・・明忠院・・・250m・・・鷲津砦跡・・・400m・・・丸根の陸橋・・・500m・・・丸根砦跡・・・100m・・・下村の神明社・・・200m・・・山神社・・・500m・・・長寿寺・・・300m・・・JR 大高駅　約 3.5km

① 鳴海八幡宮（緑区鳴海町前之輪 23)TEL052-621-4515
江戸時代から鳴海宿と大高の中間に前之庵という集落があり、古鳴海とともに鳴海の枝郷の一つで、その地に鎮座。末社が十社あり、北野天満宮、稲荷社、香良洲社、祓戸社は別殿に祀られている。境内には楠の巨木があり、明治以後八幡社と称されていたが昭和四四年にもとの八幡宮になった。

祭神は応神天皇（おうじんてんのう）、瓊々杵尊（ににぎのみこと）、玉依姫命（たまよりひめのみこと）、神功皇后（じんぐうこうごう）、月読命（つきよみのみこと）であり、鳴海の宿場の氏神様である。元は成海神社の分社のように詳しくは分からないが、宿場町の氏神として祭礼行事が執り行われていた。江戸中期には祭礼が成海神社の裏方と八幡宮の表方に分かれ、それまでの笠鉦（かさぼこ）行列、馬の塔（おまん）などの祭りから、裏方の山車の引き回しのような一層賑やかな祭りに変わった。後発の表方は豪華な彫り物を飾ったお囃子車を導入、ともに小太鼓、大太鼓、笛、鉦など熱田神楽など奏でて賑々と現在までも続いている。また表方の祭りには狸々が登場する。尚白壁の社務所は旧鳴海町の役場庁舎（明治三十六年建築）を移築したものである。

② 孝養山明忠院（みょうちゅういん）曹洞宗（緑区大高町鷲津 5）TEL 052-621-2044
天正元年(1573) 鷲津山領主山口海老之丞が父母の追善のため創建。元は中之郷に明忠庵と称し真言宗に属して六坊の密院を建て広い寺域を持っていたが兵火で焼かれ廃寺同様になっていた。元和五年(1619) 海老之丞の孫ら山口一族が再興し、春江院の善庵和尚を中興開山として曹洞宗に改宗。享保十七年(1732) 現在地に移転。JR 大高駅東方二百米の鷲津山の北麓にある。

本尊は釈迦如来金銅座像で三国伝来と伝えられ、堂宇は本堂、地蔵堂、毘沙門堂、庫裡、書院、山門等がある。毘沙門天は大和の信貴山朝護孫子寺（しぎさんちょうごさんじ）より勧請し、裏参道には青峰山観音がある。なおこの明忠院は先代の住職が大正十年(1921)に県下で初めての保育施設を開設し、その記念碑がある。また精霊殿という屋内墓地があり位牌を小箱に入れて祀られている。

③ 鷲津砦跡（緑区大高町鷲津山）
大高駅北二百米の地点にあり、永禄二年(1559) 織田信長が今川氏に対抗するために丸根砦とともに築いた砦であり、大高城と丸根砦との三角形の位置にある。標高三十米、東西四十米、南北六十九米の広さである。

桶狭間の戦いの時、飯尾定宗、その子信宗、織田信平ら、五百余人が今川勢の朝比奈泰朝ら二千余人の軍勢に攻め立てられて大半が討死している。南北朝時代(1331～1392)尾張の守護土岐頼康の一族に鷲津殿、島田殿、萱津殿と称した家があり、鷲津殿がいた所はこの鷲津山であった。土岐氏の老臣花井・富田の二氏が尾張に来て守護代を勤め花井氏が鷲津方、富田氏が富田方（現東海市富木島町）を支配し、土岐氏との関係から離れて独立すると両者はこの地で抗争を続け、大高は花井氏が支配した。昭和十三年国の指定史跡になった。

④ 丸根の陸橋（緑区大高町西丸根）
昭和四年(1929)頃大高町西丸根、亀原地区の丘陵地に耕地整理組合によって高級住宅地として開発が始まり丸根橋、亀原橋（現在はない）が道路の切通しに架けられ住宅地としてスタートした。

⑤ 丸根砦跡（緑区大高町丸根）
鷲津砦の東南七百米の地点にあり、鷲津砦と同じく信長の築いた砦で標高三五米、東西三六米、南北二八米の楕円状のこぢんまりした砦で一部郭と濠が形を残している。永禄三年(1560)桶狭間の戦いの時佐久間盛重が手勢七百人で守り、松平元康ら今川勢の軍と激戦したところで、鉄砲が使用されたといわれる。この砦の陥落で今川義元は杣掛城より桶狭間を通り大高城への進路を確実にしたと考え、熱田をへて清須の織田本拠を攻める手立てを考えていたのであろう。昭和十三年大高城跡、鷲津砦跡とともに国の指定史跡となる。

⑥ 下村の神明社（緑区大高町西丸根 26）
通称大浜街道東百米程の丘陵地で丸根砦のすぐ北のところに南向きで石灯籠四基が立つ。延元年間(1336～40)に伊勢志摩より来た下村九郎兵衛が勧請、祭神は国常立尊（くにのとこたちのみこと）で下村神明社とも言い、下村氏の氏神とされている。

⑦ 山神社（やまのかみしゃ）(緑区大高町西丸根 14)
八十センチメートル四方の小祠を鞘堂（さやどう）で覆いを付けた小社で祭神は大山祇命（おおやまつみのみこと）。創建は不詳。鞘堂のある社はこの辺りではめずらしい。当社は山仕事、猟師の人達が安全を願って祀られたものである。往年は樹木が繁茂した社叢をなしていたが、新幹線が開通し、宅地が開発されて住宅が建ち、旧観は見られなくなった。

⑧ 鷲頭山長寿寺（ちょうじゅじ）臨濟宗永源寺派（緑区大高町鷲津山 13）TEL 052-621-4652
初め真言宗に属し長祐寺と称し桶狭間の戦火で焼けたほか創建年代など不詳。江戸時代になって尾張藩の家老職志水甲斐忠時（宗秀）が祖母長寿院元操尼の遺命により、延宝八年(1680)尾張藩主光友より援助をうけ（寺域拡張の許可と寺領百石賜る）、天和二年(1682) 一大伽藍を建立。

越伝を招聘（しょうへい）し中興開山として宇治黄檗山（おうぼくさん）を模倣した多くの堂舎僧坊を造営し、宗派を黄檗宗に改宗、祖母の法名に因み長寿寺と改めた。その後故あつて元禄四年(1691) 石梯道雲（せきていどううん）の代に臨濟宗永源寺派になった。本尊は木造阿弥陀如来座像で他に薬師如来像、観世音菩薩像、地藏菩薩像、文殊菩薩像等がある。志水家の菩提寺で九代から十四代までの墓がある。また明治二一年(1888)の火災により本堂、庫裡が焼失し、明治三一年に再建された。残っていた鐘樓門は大正元年(1912)の台風で倒壊し、ケヤキ柱の立派な鐘樓門が再建されたが今次大戦で惜しくも焼失した。現在は昭和五四年に全伽藍が近代建築に造り替えられ趣を一変させている。

なお文化文政(1804～1829)の頃、知多の新四国八八ヶ所の霊場の八七番札所が設けられ弘法堂があり、その他高蔵坊狐のいわれの「高蔵坊稲荷」や境内入り口右の丘の上にある西行庵跡地に茶人下村実栗の「哉明翁寿碑」がある。

⑨ 大浜街道（県道名古屋碧南線）
県史による明治十二年(1879)の国県道一覽表によれば常滑街道の大高から分かれ（大橋北方の交差点）→大府→緒川→刈谷→高浜→新川→大浜に達する道路。大浜、高浜の三河湾沿岸部から名古屋方面を結んだ。明治三九年(1906)に常滑街道が千鳥橋経由に付け替えられた為、起点が鳴海の旧東海道に移され、大正十三年～十五年(1924～1926)にかけて鳴海町作町の三差路から大高駅の東まで幅七．三米の新道が完成した。現在の様に大高駅の東から長寿寺に抜ける道は昭和の十年代になってからである。

⑩ 大高駅　TEL 050-3772-3910　JR 東海サービス相談室
明治十九年(1886)三月一日県内で武豊、半田、亀崎、緒川、熱田とともに最初に設けられた鉄道駅。当時は単線で駅舎はなくホームが一本あるのみ。切符の販売は駅前の個人宅に委託されていた。その後明治二二年に東海道線が全通し、駅舎がいつ整備されたかは解らないが、明治四十年には複線になり利用者は徐々に増えつつあった。昭和十年(1935)に大日本紡績（現ユニチカ）が誘致され、専用線が設置されると同時に駅舎の改築がなされた。昭和二八年には念願の電化が完成し煤煙から解放された。昭和三七年に新幹線工事にともない当時珍しい橋上駅となった。それまでは町屋の主力は西側にあるのにかかわらず、駅舎は東側しかなく、踏切を渡る不便さがあったので、東西自由通路ができて便利になった。昭和五三年高架化された時に駅前が整備され現在の駅に作り直された。

大高の昔。左から上へ、大高の先史、猿投山麓から第三紀層の丘陵は南に伸びて鳴海丘陵を経て知多半島へと連なっている。この丘陵の北部に源を発した天白川が流れ、この川下の平野は古代から年魚市潟（あゆちがた）と呼ばれた地であり、丘陵とこの低地がおりなす造形の妙は天白川周辺に多くの谷を構成している。この谷が先史時代人の生活を営んだ地形的環境であり、その多くの遺跡が発見されている。天白川左岸の鳴海丘陵には上ノ山（うえのやま）、鉦の木（ほこのき）、雷（いかづち）、矢切（やぎり）の貝塚、右岸の瑞穂丘陵には瑞穂遺跡、笠寺丘陵には桜田貝塚、見晴台遺跡がある。しかし大高川の流れる谷丘陵地には現在のところ貝塚、遺跡らしいものは発見されていないが、近年調査で平野遺跡の小石器、西大高畑から水上の山頂にかけては弥生式遺物が、斎山古墳の付近では小規模ながら貝塚群が発見されている。古墳時代については隣接の東海市名和から一連の丘陵続きに愛知県最古の兎山（かぶとやま）古墳（四世紀末東海市）があり、その東の火上山の西麓に三基の小さい三ツ屋古墳群（六世紀後半東海市）と斎山（いつきやま）古墳がある。この古墳は直径三十米、高さ三米程の円墳だが前方後円墳であったともいわれ、出土した埴輪から六世紀のものと考えられる。現在ではこれより東の大高川左岸にも古墳があった可能性は高く尾張の豪族との関係が深いものと思われる。

大高の昔
☆大高の先史
猿投山麓から第三紀層の丘陵は南に伸びて鳴海丘陵を経て知多半島へと連なっている。この丘陵の北部に源を発した天白川が流れ、この川下の平野は古代から年魚市潟（あゆちがた）と呼ばれた地であり、丘陵とこの低地がおりなす造形の妙は天白川周辺に多くの谷を構成している。この谷が先史時代人の生活を営んだ地形的環境であり、その多くの遺跡が発見されている。天白川左岸の鳴海丘陵には上ノ山（うえのやま）、鉦の木（ほこのき）、雷（いかづち）、矢切（やぎり）の貝塚、右岸の瑞穂丘陵には瑞穂遺跡、笠寺丘陵には桜田貝塚、見晴台遺跡がある。しかし大高川の流れる谷丘陵地には現在のところ貝塚、遺跡らしいものは発見されていないが、近年調査で平野遺跡の小石器、西大高畑から水上の山頂にかけては弥生式遺物が、斎山古墳の付近では小規模ながら貝塚群が発見されている。古墳時代については隣接の東海市名和から一連の丘陵続きに愛知県最古の兎山（かぶとやま）古墳（四世紀末東海市）があり、その東の火上山の西麓に三基の小さい三ツ屋古墳群（六世紀後半東海市）と斎山（いつきやま）古墳がある。この古墳は直径三十米、高さ三米程の円墳だが前方後円墳であったともいわれ、出土した埴輪から六世紀のものと考えられる。現在ではこれより東の大高川左岸にも古墳があった可能性は高く尾張の豪族との関係が深いものと思われる。

☆大高の地名
大高の地が古くは水上邑（火上也）と呼ばれていたことは水上姉子神社の社名によって現在まで伝えられている。古事記、日本書紀によると、日本武尊が東征する途中に尾張国造りの祖建稲種命（たけいなどねのみこと）の妹宮賀媛（みやすひめ）の家に立ち寄り、媛を娶り東征の任を果たした。熱田大神宮縁起寛平二年(890)によると草薙劍（くさなぎのつるぎ）をこのとき尊から授かり、媛により熱田に祀られたのが熱田神宮の起源となった。そして媛の住居のあった所が後の愛知郡水上邑であり、媛没後水上邑の神として祀られ水上姉子神社（ひかみあねこじんじゃ）となったのである。また同縁起のなかの日本武尊の歌に「奈留美良乎（なるみらを）美也礼波志保志（みやれはとよし）比多加知爾（ひたかじに）己乃由不志保爾（このゆしほに）和多良部牟加毛（わたらへむかも）」とありこの「比多加知」は、本居宣長の古事記伝には「比多加知は火高地なり」とあり、「水上とも火高とも言いしなるべし」とある。またいかなる理由で水上邑、火高が大高になったのか。水上姉子神社の祠宮久米家の文書によれば永徳二年(1382)火災があって社殿や民家の多くに被害があり、「火高」の火の字を改めて大高としたと言うのである。

☆中世の大高
大化改新のころは国司・郡司が置かれ、当時は成海郷に属し、現在の鳴海、有松、豊明、大高、名和辺りまで含まれていて愛知郡に属していたが、いつの頃から子細は分からないが戦国時代に再編され知多郡になった。室町時代になり尾張の守護、土岐氏の臣が鷲津山に居を構え、その守護代を鷲津殿と呼んでいた。永正六年(1509)の文書には大高城主花井備中守の名がみえ城が築かれていたものと思われる。その後知多郡緒川の豪族水野氏の居城大高城になるのだが、前掲の久米家文書によると天文十二年(1543)には大高城主水野大膳亮の名がみえ、既に十六世紀前半には大高を領有していたと思われる。

戦国時代織田領と今川領の接点であったこの地方は桶狭間の戦いの前哨戦として小豆坂（あずきさか）(岡崎市)の戦いが天文十一年(1542)と天文十七年(1548)に始まり織田信秀と今川（松平広忠）と最初の戦いで織田方が、二度目は今川方の勝利とされるがいずれも決定的ではなかった。その後各地で小競り合いがあり、有名な松平元康の大高城兵糧入れもあった。永禄三年(1560)には義元の織田討伐が始まり桶狭間の戦いとなった。まず大高城、丸根、鷲津の攻防で織田方が敗れ、また桶狭間近くの前軍の戦いでも大敗を喫っていて織田方が不利であった。しかし今川方は油断があって雷雨に乗じて奇襲をうけ織田方の勝利に終わった。これで信長は天下統一の大覇業に向かって進むこととなり戦国乱世を暗示するものだった。

☆江戸時代の大高
徳川の時代になって大高は藩主義直公の母（相応院）方の生家である志水甲斐忠宗の領地となり、元和二年(1616)大高城跡に屋敷を構え、明治二年版籍奉還となるまで支配していた。また志水甲斐守の給知以外は鳴海陣屋（代官）の支配下であった。慶長十三年(1608)の伊奈備前守によって行われた備前検地帳によれば、田百一町六反余、畑五五町一反余合計一五六町七反歩で石高一七一二石余（元高）、耕地所有者三二五人であった。それで慶長十九年(1614)頃から新田開発が行われ、天白川左岸の河口付近の干拓を進め、特に込高新田は海部郡の福田、知多郡の加木屋から入植させ、御小納戸資金で延宝八年(1680)に約二十町歩畑が開発された。その時用水池として蛇池が造成されたと言われている。その後宝暦二年(1752)志水甲斐守領となり三五戸一八三人との記録が残されている。もともと大高は志水甲斐守の給知であるので蔵入れり税が高かったので住民は窮乏していた。文化十二年(1815)には二三四町四反四畝農家六一四戸であり、一戸当りは三反八畝と減っていたしかも大部分は小作農であった。江戸末期になって久久山地带六五町歩の山林開墾が始まったが、終了は明治になってからである。大高では元禄ころに酒の株制が敷かれ、当時の酒株帳によれば大高村は二百石で遠く江戸まで出荷した。また享保十七年(1732) 六斎市を開くことが藩より許可された。